

Title	インドにおける一農民指導者の思想の軌跡(続) : ス ワミー・サハジャーナンド・サラスワティー (1889-1950)
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学学報. 38 p.93-p.111
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80610
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

インドにおける一農民指導者の思想の軌跡（続）

— スワーミー・サハジャーナンド・サラスワティー (1889-1950) —

桑 島 昭

Sho KUWAJIMA

स्वामी सहजानन्द सरस्वती (१८८९-१९५०)

द्वितीय खंड

शो क-वाजीमा

५. द्वितीय महायुद्ध और भारत

- (१) कांग्रेस से निष्कासन और समझौता-विरोधी सम्मेलन
- (२) " फासिज्म विरोधी युद्ध "
- (३) " अगस्त-क्रान्ति " और कांग्रेस में पुनः प्रवेश

६. द्वितीय महायुद्ध के बाद

- (१) हिन्दु किसान सभा की स्थापना
- (२) संयुक्त किसान सभा का जन्म और कांग्रेस से इस्तीफा

उपसंहार

द्वितीय खंड की सामग्री बिहार राज्य अभिलेखागार और सच्चिदानन्द सिन्हा प्रस्तकालय (पटना) से भी ली गयी है ।

इस निबंध को तैयार करने में लेखक किसान सेवक स्वर्गीय पंडित यदुनन्दन शर्मा का आभारी है ।

5 第二次世界大戦とインド

(1) 会議派からの追放と妥協反対会議

1940年代のサハジャーナンドは、追放された会議派に復帰し、またその後離脱するという曲折に富んだ道歩⁽¹⁾を歩んでいる。植民地からの解放という課題を抱えた大戦期インドにおける反ファシズムの位置、また「統一インド」のなかに生まれたパキスタン国家要求運動の評価という二つの困難な問題がサハジャーナンドの思想に複雑な影を投じたからである。しかし、彼は屈折感にあえぎ「個人主義」のかげりを帯びながらも、会議派による独立構想の具体化過程、就中その農民政策の重大さに眼をつむることはできなかった。かくして、大戦期の試煉をくぐった晩年のサハジャーナンドは、会議派と農民運動について経験に裏付けられた歴史的な把握ならびに展望を提出するのである。

サハジャーナンドの会議派追放の契機となったのは、1939年6月に会議派全国委員会が採択した二つの決議である。その一つは、会議派州政府の裁量に属する事項にかんして州会議派委員会の公然たる介入を禁じたものであり、他の一つは、会議派メンバーによるいかなるサティヤグラハの提案ないし組織化にも当該の州会議派委員会の事前の許可を前提としたものである。州政府、州会議派委員会、一般メンバーの順に政策と規律のヒエラルキーを確立したこれらの決議は、1937年以来の州政府の経験に基づいて、1920年以降大衆運動体としての性格をもっていた会議派の歴史に決定的な区切りをつけることを意図していた。

この決議に対抗するために結成された左翼強化委員会の最初の統一行動である7月9日の抗議デモで規律違反を問われたスパーシュ・チャンドラ・ボースはベンガル州会議派委員長⁽²⁾の座をおろされ、サハジャーナンドはビハールにおいてサティヤグラハを許可なしに続けているという理由で会議派を追われた。しかし、左翼強化委員会は、その参加団体である会議派社会党、インド共産党、急進会議派党员連盟(M.N.ローイのもとに集まったいわゆるローイスト)が会議派の「統一」ないしは会議派との「統一」の基本的姿勢を崩さなかったために自壊した。大戦初期のサハジャーナンドの左翼政党不信感には、州段階ではじめて権力に就いた会議派の性格の変貌をこの時期の統一戦線論がどの程度持続的に究明しえたかへの疑問が重なっている。このとき会議派の「統一」を守ってサハジャーナンドを異端視した会議派社会党と共産党自身、大戦後会議派からの離脱を余儀なくされたのをみても、この問題はきわめて重要な意味をもっている。しかし1940年3月、会議派大会の予定されたビハール州ラームガルで、会議派の如くイギリス帝国主義と妥協しないという意味において、妥協反対会議が、サハジャーナンドを歓迎委員長、ボースを議長にして開かれたとき、会議派社会党の論客は会議派自身真に反帝国主義的となる十分な力量があるとして会議に反対し、国民会議派の急進化を要求する共産党もこれに参加してい⁽³⁾ない。

他方、大戦の勃発はビハール州農民運動に転機を促した。1939年7月、農民サティヤグラハによる獄中生活から釈放されてパートナーの農民組合事務所を訪れたラーフルは、「ビハールのす

すべての地区で農民は自分の農地を手離すことをゆるさぬ決意をし、ガヤー地区だけでも50以上の村でサティヤグラハが始まっている」ことを知る。⁽⁴⁾ パトナー、ガヤー、シャーハーバードの三地区を管轄するパトナー^{コミッショナー}地方長官も、6月の耕作シーズンの到来とともにバカーシュト・サティヤグラハ再開の兆を認め、7月から8月にかけて多くの事件の発生を伝えている。⁽⁵⁾ しかし、サティヤグラハの件数はその後次第に減少し、12月中旬頃の情勢報告をしたコミッショナーは、ガヤー地区のどこにもサティヤグラハはなく、さしあたり大規模なものは予想されないと楽観していた。

一時はビハール州各地を席卷したバカーシュト闘争の急速な収束の一因には、インド独立の要求にたいするイギリスの否定的態度に抗議してビハール州会議派もまた10月に州政府から引揚げていたことが挙げられる。プラサードの自伝も、「会議派州政府が辞職したあとで争いはおのずと終わったようだ。このあとではサティヤグラハについて耳にすることがなかったから」と記している。⁽⁶⁾ バカーシュト闘争が会議派州政府にたいして要求の法制化、あるいは法の具体化を期待する性格をもっていたことはたしかである。

そして、この点は農民運動の担い手の問題にかかわってくる。1939年の警察の報告書は「年末にかけて農民紛争の著しい減少があったが、それは経済状態の改善と戦争による農産物価格の上昇に負うところが大きい」としている。⁽⁷⁾ ビハール州政府も、1940年1月前半の政治報告書において、農業情勢が異常に平穏で、サハジャナーンドのガヤー農民へのアピールも効なく、農民は地主と闘うよりも豊かな稲の刈取りに忙がしいとのべていた。⁽⁸⁾ 1930年代のビハール州農民運動の主要な担い手が小作法および農産物価格上昇の一定の恩恵に浴する階層であったことをこれらの報告は明らかにしている。1940年3月、アーンドラのパーラーサーにおける全インド農民組合第五回大会は全国的な地税・小作料不払闘争による反戦・反帝国主義の課題の遂行を提起したが、ビハールのみならずインドの農民指導者が戦争の農民内部への重層化した影響を十分に掌握し、これを運動レベルで生かしえたか否かに、反戦運動の農村における成功の鍵があったと思われる。しかし、大戦を契機にして農民運動の性格を一挙に変えることは容易でなかったといえよう。

ところで、さきの警察の報告書を引用したビハール州地主協会の役員が農民紛争の減少の理由を会議派による法的規制の決意にも求めていることは象徴的である。もちろん、大戦初期の農民運動の後退の要因にイギリスの弾圧があったことを見逃すことはできない。パーラーサー大会の議長を予定されたラーフルの逮捕、反戦演説を理由とした1940年4月19日のサハジャナーンドの逮捕、そしてこの逮捕を「新しいインドへの挑戦」として歓迎したボースの7月2日の逮捕は、インド東部における大衆運動弾圧の総仕上げの意味をもっていた。⁽⁹⁾

ボースとサハジャナーンドに共通し、両者を結びつけたものは、ガンディー、およびパテールに代表される会議派右派指導層にたいする批判的態度である。彼らは1930年代の運動過程においてガンディーと抜きさしならぬ対決の場面をくぐっていただけにガンディーをシンボルとする会議派の「統一」には必ずしも拘泥しなかった。たしかに、ボースの「民族主義」もサハジャナーン

ドの「農民主義」も強烈な個性に支えられていたが、両者の行動が州政府総辞職にさしかかった時点における会議派の体質を浮彫りにする役割を果たしたことは否定できない。

（２）反ファシズム戦争論への移行

サハジャーナンドの政党不信感は獄中に入ってさらに倍加した。ことに、新しく獄入りしてくる政治犯にたいする物理的圧力をふくむ入党の勧誘、自己の絶対化と反対者の意見の抹殺は、恐怖に近い感情を彼の心に植えつけている。あるとき、サハジャーナンドは、当時獄外にいた全インド農民組合書記長ラスールへの私信において政党についての「歪んだ」考えを伝え、社会党、前衛ブロックに次いでインド共産党もまた彼を失望させるのではないかという懸念を表明している。ラスールが共産党員は農民組合の活動に損害を与えぬと保証したとき、サハジャーナンドはこの返信にいたく喜んだといわれる。¹¹⁰

大戦期後半、サハジャーナンドが共産党と歩調を共にしえたのは、反ファシズム戦争論、および会議派の訴える反英大衆闘争への批判という共通の認識の存在が主因となっている。また、現実には、全インド農民組合の方向を定めるうえで共産党の指導力が支配的となってきたことも影響している。傘下のビハール州農民組合を例にとれば、サハジャーナンドの入獄後、その主導権をめぐって会議派社会党、前衛ブロック、インド共産党間の争いが激化したが、このうち、会議派社会党は1941年3月以降別組織の州農民組合を発足させ、サンタール族農民に働きかけた前衛ブロックの影響力も限定されたものであった。

1941年6月22日の独ソ戦開始という新しい段階における大戦の性格についてのサハジャーナンドの説明は、ぎこちなく、「公式的」である。大戦の初期にマルクス、エンゲルス、レーニンとロシア革命に学んで「戦争に反対する戦争」を實踐して獄中に入った彼は、ヒットラーのソ連攻撃後まもなく、6月末にはこの原則の放棄に思い至ったという。サハジャーナンドによれば、「戦争に反対する戦争」は一般的な資本主義の状況では正しいが、現在はその暴力的、ファシズム的、金融資本主義的形態をとり帝国主義の死滅の時期にあたっている。ファシズムは世界の脅威であり、もっぱらイギリス帝国主義からの解放をゆっくりと待っていれば我々はヒットラーから自分達の生命も守れなくなる。それ故、この脅威には相違を越えて対決すべきであるとする。この考えは友人に見せられたジョン・ストレッチャーの書物によってますます確信を深め、「我々は軍事産業でイギリス政府を援助することもできる」という対英協力の可能性の模索にまで及んでいく。¹¹¹

ちなみに、サハジャーナンドが重視している全インド農民組合の中央農民委員会決議（1942年2月、ナーゲプル）にしても、ロシアが闘っているのは人民戦争としながらもインドについては明確な留保条件を付している。

「……この戦争は、民族政府の指導のもとでインド人民の自発的で心からの協力を得られるときのみ効果的にインド人民の戦争に変えることができる。しかしながら、委員会は、現在の状況のもとでは戦争を成功裡に遂行するために人民と資源の効果的な動員を行なうことができない

と考える。」（傍点引用者）

1930年代に世界恐慌後の帝国主義のインド農村支配を経験的には受けとめながらも、サハジャーナンドは農民運動の経験を逆に帝国主義の世界史的把握へと凝縮させるには至らず、イギリス帝国主義批判の基本的枠組については従来その内容を問いつつも会議派に委ねていたということができよう。しかし、会議派からの追放と戦争という状況は、農民奉仕家サハジャーナンドに否応なく自身の手で帝国主義批判の枠組を作ることを迫った。彼は視点の弱さを急遽マルクス主義についての彼なりの解釈と「地主も資本家もない」ソ連の存在によって補ない、独ソ戦後には「誰にも相談することなく」反ファシズム戦争論に到達したという。サハジャーナンドは、ここで、独ソ戦を契機に戦争の性格が帝国主義戦争から反ファシズム人民戦争に変わったとするインド共産党の「国際主義」とは異なる、自主的な決断を印象づけようとしている。しかし、少なくとも大戦論にかんする限りは、「公式」的なマルクス主義が1930年代の農民運動論の奔放な発想を押しつぶしていることは否めず、1942年の「八月革命」の嵐は、サハジャーナンドにおける大戦論と農民運動論との間隙を荒々しく吹抜けたのである。彼がマルクス主義から思想的活力を引出すには、さらに数年の「反帝国主義」組織、会議派とのきびしい苦闘を待たなければならなかった。

しかしながら、1942年3月8日の釈放後、サハジャーナンドの現実の息吹に触れた発言には力強い説得性がある。2月15日のシンガポール陥落に際してはイギリスの敗北を祝してビハール州の一部では菓子が配られているが、サハジャーナンドは前述のナーゲプル決議の解説のなかで「日本が我々に自由を与えると公言している者」に次のような反論を加えていた。⁽¹²⁾

「朝鮮、台湾を引続き30～40年も踏みにじり、満州等を破壊し、自国の勤労者に十分な食物を与えず、公然たる発言もゆるしていない者がどうして我々に同じことをゆるすであろうか。」

7月、ガンディーが日本軍のインド侵入に際しては全力を以て抵抗するとのべたとき、滞印十年の日本商社スポークスマンは、この対日公開状に流れるガンディーの「真情」を、「日本に対して『侵入するな』の大それた警告ではなくして、行動の自由さへ許されるならば日本を訪問して日本の意向を直接聴きたいといふ真摯なもの」と解釈している。⁽¹³⁾しかし、サハジャーナンドの疑問を解消させるには、彼のかつての盟友ボースへの日本の「支援」を以てしても不可能であつたろう。

反ファシズムの課題を優先させるサハジャーナンドとは異なり、国民会議派は、日本軍がインド国境に近づいた1942年の半ば、イギリスのこれまでの提案を不服としインドの即時独立の要求を正面に据えて、大衆的非暴力抵抗の準備を呼びかけていた。ガンディーの指導する大衆運動の開始を支持する会議派社会党系のガヤー地区農民組合は、サハジャーナンドの「反民族的・親帝国主義的活動」を非難し、⁽¹⁴⁾5月に彼のアーシュラムの所在地ビターで開かれた全インド農民組合第六回大会も妨害に遭ったが、8月4日のバクサルの集会は「スワミージー帰れ」の叫びと黒旗で迎えられ演説すらできない有様であつた。⁽¹⁵⁾サハジャーナンドは、1930年代後半の会議派州政権の幻滅の記憶が新しい農民・労働者は会議派の呼びかけに応ぜず、自覚した学生もまた反対するであろうと予測した。⁽¹⁶⁾しかし、会議派はすでにその州政府を引揚げることによって反帝国主義

の旗の下に民衆の不満を凍結しており、1930年代の記憶が民族解放への欲求を規制しきれない新たな現実が登場しつつあった。

（３）「八月革命」と会議派への復帰

1942年の「八月革命」は、8月8日の会議派全国委員会の「インドを立去れ」決議と翌朝にはじまるガンディーおよび会議派指導者の逮捕が導火線となった以上、会議派州政権の「幻滅」を打消して余りあるものであった。第二次世界大戦後、会議派はガンディーの名において闘われたこの「革命」の新鮮な記憶を共産党の組織外への追放、州議会選挙（1946）の勝利と州政権への復帰に結びつけている。したがって、大戦末期のサハジャーナンドの曲折も、この会議派路線との泥沼の闘いにおける挫折に他ならない。

1942年8月9日、サハジャーナンドは、イギリスの無暴な弾圧は目的を達成することはないと批判し、農民組合が会議派の運動に反対することはありえないとしてイギリスへの加担を拒否する一方、我々はこの運動に参加することはできないが将来の態度は事態の進展にかかっているとした。⁽¹⁷⁾この声明は、「革命」当初彼がきわめて慎重に状況に対応していたことを物語っている。

ビハール州において、運動は州政庁前の学生を中心とした11日の闘争を最初のピークとして、パトナー市から地方の小都市や農村部にまで波及した。しかし、運動についての報道規制はきびしく、「(1)会議派の大衆運動から生ずるいかなる事件、およびこれに関連して政府のとった行動についての報告・論評、(2)軍隊・警察の行動について申立てられた報道」も、新聞顧問官の助言なしに発表することは許されなくなった。⁽¹⁸⁾12日の論説において、「デモンストレーション（11日のパトナーの歴史的なデモ）は、鼻の先はもう見ようとしぬ官僚達を除いてはすべての者にメッセージを送っている」と表現した会議派系『サーチライト』紙の編集長、M・M・プラサードは、ジャーナリストとして、また会議派メンバーとして政府の規制を受入れることはできないとして、20日以降論説を書かないことを宣言したうえ、同紙はその日から翌年3月24日まで停刊している。また、国内の混乱の進行中に日本軍が忍び入ることを防ぐ限りにおいて政府の態度を支持しつつも、インドの戦争への全面的支援のためには「何か他の措置」が不可欠であるとした『インディアン・ネーション』紙もまた、地主層の利益を代弁するとみられながらも、自尊心のあるジャーナリストであれば政府の規制を認めることができないとして8月17日以降論説を掲載せず、その後新聞への規制と通信網の遮断を理由に9月6日から翌年4月8日まで停刊している。

運動への批判者ラーフルをも感動させた初期のパトナーの状況、およびパトナー・ジャーナリズムの姿勢は、イギリスの弾圧が逆に会議派の路線をこえて民族的抵抗の意識を深く掘り起していることを示している。インド共産党が、初期の段階では、8月11日の時点ですでに弾圧に抗議するストライキを中止させ、学生層からみずから孤立したことを重大な誤ちであったと反省していたことは注目されてよい。⁽²⁰⁾

ビハール農村における「革命」の全体像は現在でも十分に明らかにされているとはいえない。

ラーフルによれば、彼がバカーシュト闘争を指導したアムワリーやジャヤジョーリーでは、農民はラーフル・バーバー（バーバーは敬称）の指令やスワミージーの手紙を持ってくればこの「革命」に参加すると答えて運動の側からの誘いに応じなかったといわれる。⁽²¹⁾ ラーフルのいうように、運動が「個人的利益のための略奪」の要素を包含していたことは事実であるし、ムンゲール地区ベグサライでは駅の食糧倉庫が攻撃の対象となっていた。⁽²²⁾ しかし、この運動にたいするインド側の反応は、ザミーンダール層もふくめてイギリスの期待をはるかに裏切るものがあった。わずかに、ごく少数の大ザミーンダールが運動の弾圧に積極的に力を貸している。ダルバンガーのマハーラージャーは、1942年9月17日付『パトナー・ディリー・ニュース』紙において「狂気の暴動を終らせ、正常の生活を取戻す」ことを訴えた。⁽²³⁾ とくに、ティカーリー、アマーワーンなどガヤー地区の代表的ザミーンダールは、8月26日に地区の政府・警察の幹部を混えての会議において、彼らの領内における「悪辣な運動」を許さず、運動者の逮捕に協力し、運動の一環である小作料・地税不払運動に即時対処することを誓っている。⁽²⁴⁾ この他、シャーハーバード地区ドゥムラーンオのマハーラージャー、パラム地区ランカーのラージャーなどがその協力ぶりを政府によって感謝されている。このように、「八月革命」はその進行過程においてイギリスのインド支配の危機を大地主制の危機と同一視する有力なザミーンダール層を析出する側面をもっていた。

8月31日、ドイツに脱出していたボースは、アーザード・ヒンドゥ（自由インド）放送を通じて、サハジャーナンドと農民運動の指導者達が闘争の最終段階において指導的役割を果たすことを期待する旨呼びかけている。⁽²⁵⁾ 「革命」直後ビターのアーシュラムを襲われたサハジャーナンドにこのメッセージが届いたか否かはたしかでないが、この段階ではもはやボースとサハジャーナンドとの距離は到底埋めがたいものとなっていた。この頃のサハジャーナンドの運動批判はかたくななまでに原則的な立場を強調していたからである。同月25日、全インド農民組合書記長としての彼が、ビハール州農民組合議長ジャドゥナンダン・シャルマーと共に行なった声明では、「分別のある者はこれ（このような無政府的現象）を解放闘争とよぶことができようか。…歴史上、暴力主義・略奪・盗み・サボタージュに耽ることによって一国の独立を獲得したためしはない」と論じ、運動への参加者と誘導者達が国を暴力団と不法分子に引渡すのを助けただけでなく、日本ファシストへの道をも開いたとしてきびしく批判している。両者によれば「ヒンドゥー・ムスリムの統一のための闘争が今日民族政府のための真の闘争であり、それを達成したときにファシストを打倒するためすべての統一した力を投入できる」とした。⁽²⁶⁾ この原則的な視点は当時インド共産党の提起していた「民族の統一」論と軌を一にしている。しかも、運動の拡散化につれ、全インド農民組合の立場は、反ファシズム人民戦争論に立ち「左翼民族主義」への警戒を強めるインド共産党の指導の下に運動の反帝国主義的性格、ないしはその側面を評価する余地を失っていた。⁽²⁷⁾ 1942年9月の中央農民委員会決議は、暴徒による暴力行為、サボタージュ、破壊活動を批判して運動が第五列を利するものとし、1943年4月の全インド農民組合第七回大会（パンジャー

ブ州バクナー)も裏切りの第五列と道を誤った愛国者にそそのかされた人々のサボタージュを非難している。もしも、サハジャーナンドが会議派の想定した運動の範囲をのりこえた反帝国主義運動の芽をインド、あるいはとくにビハール州に見出し、その可能性を組入れることによって反ファシズム運動論の内容を豊かにし、その運動論の高さにおいて会議派の「八月革命」論に対抗しえたならば、彼が「革命」の果実を享受した会議派のイデオロギー攻勢のまえに一方的にさらされることはなかったかもしれない。

ソ連赤軍のスターリングラードにおける闘いへの感動に圧倒されていたバクナー大会において、サハジャーナンドは、赤軍がスターリングラードだけでなく全世界を救い、その勝利は共産主義の優位とソビエトの理想の成功を立証するものだ⁽²⁸⁾と演説した。彼は独ソの攻防に自己の反ファシズム論の正しさの確認を求めたのであるが、ビハール州農村の弾圧下の暗い状況のなかに根を張ることのできなかった彼の大战論はやがて窮地に立たざるをえなかった。

1943年のベンガル飢饉の影が全土をおおうなかで、農民運動の主要な方向は地主層の協力をも模索する食糧増産運動へと向けられていく。アーンドラはいわばこの運動の突出部となっていた。1944年3月、アーンドラのベーズワダーで開かれた全インド農民組合第八回大会は、インド共産党の自信をそのままに反映していたが、ひとり議長サハジャーナンドの演説のみは、共産党書記長P. C. ジョーシーの耳に、「8月9日以後の弾圧のショックから未だ回復せず」「一般の愛国者の無力感に息づいている」ものとして聞えた。サハジャーナンドは「農民組合が現在最低の衰退状態にあることを認めるのは心痛の思いである。そして恥ずべきことにこの状態がいつまで続くかわからない」とのべ、「我々は勇気をふるいおこし、いま直ちに出口を見つけることはできないであろうか。おそらくできない」と内面の苦悶をさらけ出している。⁽²⁹⁾1930年代に疾風怒濤の活動で築いてきた農民運動の場、ビハール州で1942年の運動がもっとも激烈に展開され、イギリスの弾圧下で農民運動の建直しも困難を極めただけに、サハジャーナンドにはアーンドラの現実もうつろにしか映らなかったのである。

他方、インド共産党の「民族の統一」論は、「八月革命」への批判とならんで全インド・ムスリム連盟のパキスタン国家要求にたいする一定の支持をも表明していた。ジョーシーは、パキスタン要求の受諾が伝統的な統一インドの観念には背いてもインドはそれによってむしろ強くなるとすらのべていた。全インド農民組合が1942年のビター大会以後パキスタン問題について中立の態度を決めていたにせよ、農民組合における共産党の比重の増大が「伝統的な統一インド」の世界に生きるサハジャーナンドに焦燥感を抱かせたのは当然といえる。農民の問題は宗教を超えするという経験に照した彼の発想も変っていなかったと思われる。共産党との関係はこの面からも摩擦が強まっていった。

1944年11月、中央農民委員会は、サハジャーナンドの懸念も考慮して政治決議の通過には少なくとも4分の3の多数の支持を必要とするという歯止めをかけている。⁽³¹⁾しかし、こうした憲章改正もサハジャーナンドの心を安めることにはならなかった。当時、会議派の側からは、「インドを

立去れ」闘争（＝「八月革命」）に反対した共産党が支配しているので農民組合は反民族的であるという攻撃が加えられ、他方、ムリズム連盟を支持する農民は、一部の農民組合支部でパキスタン要求の公然化の機会を狙っていたのである。³²⁾「ヒンドゥー・ムスリムの統一」はともかく、パキスタン運動には批判的なサハジャーナンドは、こうした苦境のなかで会議派との関係の再調整に活路を開こうとして、新たな農民の全国組織を設立しないよう会議派に警告する一方で、会議派メンバーの農民組合参加を訴えた。それは、彼にとって、会議派の「民族主義」への回帰の一步を意味している。

1945年2月28日、サハジャーナンドは、中央農民委員会決議を侵犯して親パキスタン宣伝を意図的に行なったという理由で、突如、書記長、ボンベイの本部事務所、ベンガル州農民組合、ベンガルのクルナーとダッカの地区農民委員会の2ヶ月間の活動停止処分を単独で発表し、3月2日には全インド農民組合議長の地位を退く声明を行なっている。「越権行為」の挙に出た以上、彼が全インド農民組合にとどまることはもはや不可能となった。こののち、4月に開かれた全インド農民組合第九回大会（ベンガル州マイメンシン地区ネトラコーナ）はサハジャーナンドを説得する決議を一応通過させたが、大会議長となった共産党のムザファル・アフマドは「民主的団体においては組織が個人に優先するというごく単純な事実を彼は忘れている」と結んだ。³³⁾

たしかに、サハジャーナンドの「個人主義」はこの場合論外といえるであろう。と同時に、大戦期の彼の思想的屈折の問題は、反ファシズム人民戦争論を通じて彼と行動を共にした側での理論のあり方にはね返る性質のものである。「民族の統一」の理論的推進者であったアディカーリーが、1960年代に、1942年の運動からの孤立とパキスタン運動への誤った支持とを自己批判しているのを顧みるとき、大戦期に共産党の周辺にあって活動したサハジャーナンドの思想的転回は、彼の「個人主義」を割引いたとしても、大きな問題を残しているといわなければならない。

1930年代に、ザミーンダリー制の廃止をイギリス帝国主義の打倒にすら優先させるとしたサハジャーナンドにとって、第二次世界大戦への対応は至難であったに違いない。しかし、世界戦争が農民の死活の現実にかかわらざるをえないのがこの時期の特徴であった。大戦期に、戦争の結果としての農産物価格の上昇は一部の農民層を潤した。これとは逆に、「反ファシズム人民戦争」期において、食糧投機と買占めによる価格の急騰によって助長された1943年のベンガル飢饉の最大の犠牲者は、農村における最底辺の農業労働者層であり、ベンガルは「反ファシズム」戦争の最前線にも置かれていた。「農民主義」者サハジャーナンドの反戦論も、反ファシズム戦争論も、植民地支配下のインドの底辺部を構成し、戦争によってさしあたりはいささかも潤うことのないこれら多数の農民の問いに答えるものとはいえなかった。そこに、真の農民的基礎をもちえなかった彼の反帝国主義論がマルクス主義についての彼なりの解釈と会議派の「民族主義」とのあいだをゆれ動く原因があったといえる。そして、サハジャーナンドは、「民族主義」の会議派委任の形においてこの動揺に当面の結着をつけたのである。

サハジャーナンドの会議派復帰は不信の眼で迎えられたが、1946年6月の会議派全国委員会へ

のビハール州代表のリストのなかに彼の名が見られる。1947年8月、彼は会議派メンバーとして、しかしインド・パキスタン分離独立を導いたマウントバッテン裁定の批判者としてインド独立の日に臨んでいる。

6 第二次世界大戦後のサハジャーナンド

(1) ヒンドゥ農民組合の成立

全インド農民組合を退いたサハジャーナンドは、大戦期の共産党の行動を非難する会議派の政策に呼応する形で、会議派および会議派社会党系の農民活動家とともに新たな農民組合の結成に向かった。⁽¹⁾ 1945年9月、会議派全国委員会が開かれるのを機会にボンベイで農民活動家の代表者会議がもたれ、未だ会議派に復帰していなかったサハジャーナンドもこれに参加している。だが、共産党の農民組合掌握にたいする反撓を除くと参加者を共通に結びつける糸の弱いうえに、先日⁽²⁾まで共産党と行動を共にしてきたサハジャーナンドにたいする不信の空気も漂っていた。⁽²⁾ 全国組織こそ、1946年7月に、タンドンを議長に、サハジャーナンドを書記長としてヒンドゥ農民組合（the Hind Kisan Sabha）の名で成立したが、それらしい農民活動も展開しえぬままに消滅していった。

ヒンドゥ農民組合の短命の一因をサハジャーナンドに沿って理解するならば、彼には大戦期の経験から「民族主義」では会議派に譲りながら農民組合活動では会議派をふくめた政治勢力からの独立性を何とか維持したいとする悲痛ともいえる願望のあったことを指摘できる。1947年1月に書き上げたサハジャーナンドの農民組合論は、会議派復帰後の彼の複雑な立場をのぞかせている。⁽³⁾

まず、サハジャーナンドは、会議派を従属に反対する全民族の蜂起のシンボルとして認める。ここには明らかに「八月革命」の刻印が重く押されている。彼はすみやかな完全独立の達成のために農民の会議派参加を勧めつつ、ヒンドゥ農民組合が、独立闘争にかかわる事柄では、一般に農民組合メンバーは会議派から鼓舞・指導をうけると声明したことを想起している。この「民族主義」の会議派委任の立場は「八月革命」を闘った会議派社会党や熱烈な民族主義に立つ前衛ブロックへの積極的評価を導きだし、「国際主義の枠のなかに民族主義をはめこむという重大な誤ちを犯した」インド共産党やローイストへの批判を生みだす。ただ、「国際主義」批判は大戦期のサハジャーナンド自身の苦い記憶を忘れ去ろうとしているかにみえる。

しかし、サハジャーナンドの会議派への委任はここで終わっている。彼によれば、会議派は地主層を含むすべての階級の機関であって一つの階級を他の階級に敵対させることはできず、会議派内におけるザミーンダールの優位は農民の立ち上るのを許さない。ここから、農業労働者も含む農民の階級的機関としての独立した農民組合の必要が生まれる。会議派を支配している階層は地主・資本家とその仲間であり、独立後インド人の政府となるといっても彼らの政府となるのであれば本質的には殆ど何も変らない。「具体的物質ではない」ナショナリズムでは会議派の指導性

を認めながらも、会議派の階級的構成についてのサハジャーナンドの眼は冷徹であり、会議派が共産党指導下の全インド農民組合に対抗する全国組織の結成を彼に託すことができなかったのも理解できる。

会議派批判の視点は「労働者の党」にも向けられる。とくに、共産党にたいして、「労働者の党」のもとで農民組合はどうして農民の独立した階級機関になりうるかと問い、もし共産党が「労働者と農民の党」を自任するならば複数の階級の機関となって農民にたいして正しい態度をとりえないと論じている。社会主義・共産主義の状態のもとでは両者の利益は矛盾しないが、現状では、農民は農産物の高く売れることを望み、他方、労働者は工場製品が高く売れて賃金・ボーナスが増大し、その他の便宜が獲得されるのを願っており、両者の利益が相反することは明瞭であるとしている。1930年代に砂糖工場の労働者と砂糖きび栽培農民を結びつけた農民運動のなかでの連帯の追求はここでは影を潜め、政党への不信感が「理論」的装いをこらすことによって、これまで運動の場での経験に検証を求めてきたサハジャーナンドの「農民主義」は一人歩きをはじめる。

将来について、サハジャーナンドは次のように展望する。結局、革命を行なうのは労働者と農民である。したがって、それぞれが独立した組織をもち、いかなる政党もこれに規制を加えず、両者は協力のために合同委員会を選出すべきである。これを政党と呼ぶことは差支えないが、外からの押付けは御免蒙りたい。両者の協力により政党の力を借りずに革命は達成しようとしている。ここには彼の左翼政党への不信感がにじみ出ているが、独立獲得後、再び自国の経済的支配者との血みどろの闘いを通じてのみ農民の権力が確立するという彼の立論は会議派の「非暴力」の信条をもはみ出してしまっている。

サハジャーナンドは、会議派による階級闘争の遂行は難しいが、会議派メンバーはこれを農民組合を通じて行なうことによって農民の心をかちえ、独立闘争に際して彼らを会議派の支持者とすることができる。組織的に強力な農民組合こそ強力な会議派の基礎であるという。だが、ガンディーやネルーの言葉、会議派の決議を信ずれば、独立後、農民問題は解決されるという楽観は彼にはなかった。サハジャーナンドは、たしかに会議派メンバーではあったが、ザミーンダーリー制廃止をふくむ農民の要求にかんしては、農民組合に力量がなければ何も実現しないと認識していたのである。

会議派州政府によってザミーンダーリー制廃止立法が用意されつつあった独立前夜、ビハール州では再びバカーシュト闘争が活発化した。会議派州政府の存在しているときに闘争によって政府を妨害しているとの非難にたいして、サハジャーナンドは、農民は自分達の作った政府はこうした問題で援助してくれると信ずるのであり、バカーシュト闘争は民衆の会議派政府にたいする無限の信頼のあかしであるとした。大戦直後のビハール州農民運動は未だ1930年代の特徴を大きく変えていなかったことがわかる。ただ、1930年代後半の会議派州政権にたいする「幻滅」の記憶のうえに、1946年州議会選挙の結果再登場した政権にたいする「無限の信頼」を重ね合せている点に視点の坐りの悪さが感ぜられよう。会議派の「民族主義」を承認したサハジャーナンドは、

「八月革命」の戦後史への規定性を未だ解くには至っていなかったのである。

バカースト闘争の波は、ヒンドゥーとムスリムの統一に心を砕く独立前夜のガンディーの注意をもひいた。1947年5月23日、ガンディーは、農民の暴力を批判し、ビハール州政府が作成しつつある新しい計画のもとでザミーンダールは土地の「信託者」として働くのであり、ザミーンダールと農民と政府はそれぞれの義務を尽すようにと訴えている⁽⁴⁾。また、8月8日、パトナー大学図書館の芝生での祈りのあとで、ガンディーは、ザミーンダールが剣の力で農民を懲らしめようとしているという説を本当とは思わないとのべ、農民がザミーンダールから土地を奪取できると考えるならば混乱に際限はなく、スワラージもまたありえないときびしく農民を戒めた⁽⁵⁾。

しかし、ガンディーの発言は地主達を勇気づけた。8月15日の『インディアン・ネーション』紙は、この発言が地主のテロルを強める引き金となったとして農民側がガンディーに訴えたことを報じている。これにたいして、ビハール州地主協会もガンディーに農民指導者の頑迷な犯罪的活動の全リストを送るといって対抗した。ガンディーの非暴力論と「信託の理論」が農民運動の渦中に投げられたとき、ガンディーないしガンディー主義者の発言の解釈をめぐる地主・農民間の対立が増幅することも1930年代と変らなかつた。

大戦後、サハジャーナンドは、ヤージニクと共に、農民問題でガンディーとの諒解を望んだこともあった。しかし、サハジャーナンドが農民に依拠し、農民の要求を会議派州政府に向ける形で行動したのにたいし、ガンディーは農民の心を変えることなしに獲得されるスワラージに疑問を抱き、その「暴力」にたいしては会議派州政府をも敢えて楯とした。両者はともにインドの農民のあり様に明日のインドを賭けながらも、会議派州政府をはさんで対峙する二人の思想の方向性には質的な相違があった。もっとも、サハジャーナンドがガンディーの遺言とされている会議派の解体・再生の提言に共感を覚えるのは、そのとき、中央の権力機構にまで到達した会議派に彼もまた希望を失っていたからなのである。

(2) 統一農民組合と会議派からの離脱

1947年9月11日、会議派州政府によってザミーンダリー取得法がビハール州議会に提出され、法定地主制の廃止は真近に迫った。サハジャーナンドが10月にビハール州会議派委員会の農民小委員会のメンバーに選ばれたのも、農民のあいだにおける彼の影響力を無視しがたかったからであろう。しかし、会議派の目指す土地改革の不徹底性や改革をめぐる農民層内部の矛盾が顕在化するにつれて、サハジャーナンドの農民観は再び精彩を放ち始める。

同年4月5日、第六回ビハール州政治会議が州政府首相シュリー・クリシュナ・シンハの議長のもとに開かれたとき、サハジャーナンドは中間介在者廃止決議案を提出している⁽⁶⁾。そのなかで、彼は、国家と農民のあいだの中間介在者の範疇に、ザミーンダールだけでなく、広い土地をもっているが自らは耕作しない農民およびバターイー（刈分小作）で土地を耕させている者を含めるなど徹底した土地改革の構想を示している。早速、『インディアン・ネーション』紙は「威張る

スワミー」と題してサハジャーナンドの決議案の深刻さに触れ、この決議が実施されるならば、自分の土地を耕さぬプールニアーその他の地区の小作人の90%が排除され、会議への代表の75%以上が小作人としての土地を失うと警告した。⁽⁷⁾ 同紙は、とくに、プールニアーでは小作人と彼のもとで働くサンタール族のバターイーダール（刈分小作人）とのあいだの紛争が激化し、殺人事件まで発生しているとして、決議が農村部奥深く持込まれた場合の事態を予想し慄然たる思いをあらわしている。

サハジャーナンドの決議案は、みずから必ずしも耕作しなくともよい「自耕作」の概念の矛盾、「隠れた小作制度」の広汎な残存、1960年代に前面に登場したサンタール族農民をふくむ先住部族民の不満など、独立後会議派政府のおこなった土地改革の抜け穴と手をつけずに放置した問題とを予見する鋭いものであった。当然、サハジャーナンドは、会議派州政府に批判的たらしめるをえず、1947年12月31日のバクサル・ターナー農民会議の席上、政府が農民政策を転換しなければこれを「合法的手段」で交代させるとし、翌年1月1日にはガヤー地区農民の十万人の集会で、全ザミーンダーリー制の同時・無償廃止を中心とした詳細な農民の要求を発表している。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

こうして、サハジャーナンドは、1930年代にみずから描いた農民像との相克のなかで新たな農民像を追求していく。彼によれば、1927年頃から1942年頃までの農民運動は農民大衆の上層に限られた一種の中産階級の運動であったと断定される。農村における一種のプロレタリアートが農民組合に入りはじめたのは1942年以降であり、彼らと都市プロレタリアートとの結合、社会の最底辺に燃えさかる火こそ地震をひきおこし、搾取のない社会を作り出すとしている。⁽¹⁰⁾ わずか二、三年前に現状における農民と労働者の利益の対立を不可避とみたサハジャーナンドがこのように農民論を深化させた背景には、会議派の土地改革の具体化過程に伴う農民運動内部の矛盾の表面化があったものと思われる。また、それと併行して、1947年から1949年にかけての中国革命の進展がサハジャーナンドの農民論にいかなる影響を与えていたかを直接的に判断する材料は手元にない。

この時期のサハジャーナンドは、農業労働者と貧農の二階層を農民と考え、農民はここで終るとしている。しかし、現実に農民組合を構成し、支配しているのは中農と富農とであり、これらの農民層が農民組合を自分の利益のために利用し、「我々」もまた農民組合強化のために両者を利用している。ここに、1930年代の農民運動を「農民主義」者として生きたサハジャーナンドのジレンマがみられる。そのうえ、「真の農民が社会の上層にいる我々、農民組合発展の現段階においてそこに活動し、それを動かしている我々を信頼していない」という状況は重苦しい真実として彼の前に横わっている。1950年4月8日、ビハール州統一農民会議において、議長サハジャーナンドは農民と農業労働者の統一を訴え、もしも農民が農業労働者の要求を容れなければみずから後者のために闘うと演説していた。彼は農民運動がきびしい転換点に立っていることを運動のなかで認識せざるをえなかったのである。

サハジャーナンドの新しい農民像は、真の農民を身動きできなくしているダルマの観念にも批

判のメスを入れる。彼は、真の農民が神とダルマの名においてこの世の将来に希望を抱いてないと強調する。「今日、それ（ダルマ）は魂の飢えを安らげる代りに、勤労人民の搾取者・収奪者の貧欲と渴望を満たし、そのための雰囲気を用意」し、人民の本源的な力を破壊した。それ故、農民組合活動家には人民の心と頭からこの魔術を断乎取除くことが神聖な義務として求められる。サハジャナーナンドが農民の世界に生きる限り、ダルマからの農民の解放は、サンスクリット文献やインド哲学を学び、ギーターが「好き」だという彼にもっともふさわしい任務であったといえよう。

しかし、真の農民像の追求に沿った農民の組織化の願いと現実の運動との落差は大きかった。バカーシュト闘争にたいする会議派政権の弾圧下、ビハール州には四つの農民組合が併存し、インド共産党機関紙『ピープルズ・エイジ』紙は、1948年1月18日号において、全インド農民組合による他の三つの農民組合への共同闘争の呼びかけを紹介している。それは、全国的規模におけるそのような方向への要請の一環として示唆されていたのであろう。同月下旬、共産党、前衛ブロック等17の団体とサハジャナーナンドがパートナーに集まり、すべての政党の共同方針の確立と州段階における左翼勢力を結集した行動組織の設置を決めている⁽¹¹⁾。しかし、社会党は、1930年代の「左翼の統一」の経験からこの動きに参加しなかった。サハジャナーナンドが書記長となり、1948年4月に結成された全インド統一農民組合（the All India United Kisan Sabha）は新たな「左翼の統一」の延長上に生まれたものである。この全国組織の誕生については、全インド農民組合に参加を呼びかけながらも彼らに検討の時間的余裕を与えなかったといわれている⁽¹²⁾。一党一派の農民組合支配を防ぐための規定を憲章に挿入していることからみても、サハジャナーナンドの共産党にたいする警戒心は解けていなかったとみられる。

社会党とインド共産党を除き小さな左翼政党と無党派の個人を加えた「左翼の統一」は、その後1949年10月にサラト・チャンドラ・ボースを議長としてインド統一社会主義機構（the United Socialist Organisation of India）といわれる連合体を発足させた。彼らの大衆運動における基盤は強固とはいえなかったが、そのプログラムを通じてこの組織の代表者達の現状認識を知ることができる⁽¹³⁾。

まず、統一社会主義機構は内政・外交の両面で会議派中央政府を批判し、ネルーとパテルの政府は既得権益者の政府であり英米ブロックの使用人になり下ったとし、農民・労働者・没落中産階級の政府の樹立を謳っている。英連邦からの離脱と英米帝国主義との結びつきの断絶を求めたこの組織が、中国における人民権力の樹立を祝福し、10月末の段階でいち早く会議派政府による即時承認を要求していたことは注目に値する。ちなみに、インド政府が中華人民共和国を承認したのは12月30日である。

また、同機構が、「非民主的」制憲議会の作成するインド憲法を否定し、「帝国主義的」官僚制・軍隊の廃止と再編成を提起するなど独立インドの国家基盤の形成過程に根本的な疑問をはさんでいることも、ネルー・パテル体制への批判として見落すことができない。これに対置され

た、成人選挙権に基づく人民の制憲議会の招集と社会主義共和国憲法の作成というプログラムは、当時サハジャーナンドが会議派政府の弾圧に抗議して市民的自由の権利の擁護を訴え続けていた状況を考えると十分に煮詰められていなかったように思われる。

ともあれ、この組織の見解がサハジャーナンドの考えをかなりの程度忠実に反映させていたことはたしかであり、1947年1月の彼の会議派論とのあいだには決定的な差異を読みとることができるといえる。

1950年6月26日、サハジャーナンドはビハール州ムザファルプルの地でこの世を去った。このとき、彼は2月のサラト・ボースの死去後を継いで統一社会主義機構の議長であり、全インド統一農民組合の書記長であった。¹⁴⁾すでに、サハジャーナンドは、1948年12月6日に会議派を離れている。会議派が他の政党メンバーの二重登録を禁ずる憲章改正を行なったため、「独立」した農民組合に所属する彼もまた身辺整理を余儀なくされたことによるが、彼の会議派離脱の条件もまた熟していたといえる。

しかし、サハジャーナンドが会議派から再度自由になったとき、これまでの苦痛に満ちた会議派とのかかわりの歴史に明快な形で光を当てることができた。彼は、会議派の「大衆化」した1920年以降インド独立までの会議派史を、バーブー（旦那）派とジャン（民衆）派、合法主義に徹し「慎重にも慎重に歩め」の呪文を唱えるバーブー派と、ひとたびは民衆運動を発揚し、民衆の信頼をえてこそ必要なときにその破滅的爆発を防止できると考える民衆派との対立・調和のなかにみる。¹⁵⁾そして、両者の争いはときに熾烈であるが、選挙に際して後者はバーブー派を支えたとしている。当然、彼はガンディを民衆派の指導者として捉えたが、問題の所在をずばりと衝いたユニークな把握といえよう。

さらに、サハジャーナンドはこの会議派論を通じて1942年の「八月革命」の悪夢からも醒めることができた。この「革命」が規制されない民衆の（民衆派ではない）力を増大させるものであったか、それともバーブー派の力を強めるものであったかと自問するサハジャーナンドは、「革命」は民衆の力を若干増大させたがその何十万倍もバーブー派の力を強め、その結果、帝国主義はその座を彼らに明渡すことになったと分析している。「革命」における民衆の役割を認めつつも、「革命」の成果をバーブー派が巧妙に吸収し、1942年の民衆運動も結局バーブー派の「支えとなり尻尾となった」ことを悟るのである。

サハジャーナンドが、独立直後の時点においてすでにバーブー派と民衆派との関係を見抜いていたことは、彼がインド現代史の直中に身を置いていたことを改めて確認させる。国民会議派は、第一次非暴力抵抗運動期（1919～22）における「大衆組織」化の基礎のうえに1920年代の議会参加期—最初はスワラージ党という非公認の協道を通してではあるが一に臨み、第二次非暴力抵抗運動期（1930～34）における広汎な農民層の参加を背景に1937年の州議会選挙を闘い、独立への最終段階においては、議会路線への批判を一つの理由として1934年に会議派を「引退」したガンディーの名において闘った「八月革命」を、1946年の州議会選挙を通じてのインド独立へと結

びつけた。会議派にとって、民族解放闘争の昂揚期に続く時期は決して単なる退潮期なのではなく、闘争の成果を議会参加の土台に据える時期にあたっている。昂揚期にみられた民衆の欲求が議会に吸収しきれずにいずれの方向に向ったかはまた別の問題なのである。

サハジャーナンドによれば、1920年以来会議派には私利追求者が潜入していたが、基本的には独立のために命をも捨てる献身者の機関であった。しかし、1946年州議会選挙の頃より会議派に腐敗の兆候がみえ、バーブー派と民衆派の調和のうちに獲得されたインド独立以後、会議派はボーギーの集団と化したという。⁽¹⁶⁾ いかにもサンニャーシーらしい簡明直截な要約において、サハジャーナンドは1946年選挙の歴史的意義を確定している。

この視点に立つとき、会議派が人民奉仕団体への再生のためのガンディーの提言を受入れなかったことも、ガンディーの弟子達が選挙の悪弊に巻込まれぬようにとの師の助言を守らなかったことも不思議でなくなる。ただ、すでにふれたように、ガンディーはときに議会制度を民衆運動にたいする楯とすることによって自己の意志を貫くこともあり、この点でのガンディーの対応の仕方は複雑である。1949年3月中旬、ビハール州シャーハーバード地区ダカーイチ村で、サハジャーナンドを議長に、グジャラートの農民運動家ヤージニクも出席してビハール州統一農民会議が開かれた。二人は共に第二次世界大戦前に峻烈なガンディー批判を展開しているが、会議ではこの地方の言葉ボージプリーで「会議派の船は沈もうとしている。ガンディーの弟子達は金儲けに狂奔している」という歌が歌われていたという。ガンディーの暗殺後、「インドにおけるマイノリティーを救うためには自分の身命を賭す」とまでのべたサハジャーナンドは、ガンディーを通して会議派を見ることも敢えて行なっているが、ガンディーの名を語って権力に到達した組織は、インド独立とガンディーの死を転機としてガンディーの名において逆に批判される論理的必然性があったといえよう。

かくして、サハジャーナンドは「八月革命」の呪縛から自己を解放しただけではない。眼をアジアの現代史の流れに向け、「八月革命」のごときものが起らず革命人民勢力がバーブーとその政府を制圧しつつあるアジア諸国、とくに、バーブーの支配をまもなく離脱しようとしていた中国に、「革命」後のインドを対比している。⁽¹⁸⁾ 「八月革命」はサハジャーナンドを苦悶の淵におとし入れただけでなく、第二次世界大戦後のインドの歴史にたいする規定性をもっていたのである。

む す び

サハジャーナンドの死に際して、かつての論敵は彼に讃辞の雨を降り注いだ。おなじブーミハール出身のビハール州会議派政府首相シュリー・クリシュナ・シンハは、農民への奉仕に捧げられた禁欲と自己規制の真のサンニャーシーとして彼を讃えた。⁽¹⁾ 『サーチライト』紙は「今世紀に生れなければ第二のシャンカラチャーリヤ」と彼を形容し、サハジャーナンド批判の急先峰『インディアン・ネーション』紙もその「がらくた」欄で「偉大な農民指導者」「サンスクリットの硯学」として控え目ながら短文を載せている。⁽²⁾

1920年以降、サハジャーナンドは第二次世界大戦期と晩年を除いては会議派メンバーであった。彼の生涯の重要部分が会議派州政府にたいしての農民の要求の結集に向けられたこと、二度にわたる会議派からの離脱がむしろ会議派の側の規律強化の結果であったことをサハジャーナンド自身否定していない。また、ラーフルやラスール⁽³⁾の指摘するように、彼の強烈な、ときとして予期しがたい「個人主義」はしばしば同僚達を困惑させた。晩年、サハジャーナンドは社会党や共産党をふくめ政党との対話の機会を拒否しなかったが、この二つの左翼政党にたいする不信感が癒えたわけではない。とりわけ、第二次世界大戦がサハジャーナンドに与えた屈折感はまことに重いものがあつた。その重圧は植民地支配下のインド社会の課題の重さに由来しているが故に彼にとって避けることのできないものであつた。

第二次世界大戦後においても、サハジャーナンドの讃美者には事欠かなかったが、ジャドゥナンダン・シャルマーなど少数の人達を別として彼を理解する者に恵まれていたとはいえない。また、サハジャーナンドの農民観がきびしくなったことも様々の抵抗を呼びこんだであろう。しかし、この苦闘を通じて、彼は大战期に背負った「民族主義」の重荷を振りほどくことができたのである。

サンニャーシーの生活からブーミハール・カーストの運動をくぐり抜け、1930年代には富農、中農層を主たる担い手とした農民運動に身を投じ、一元的ともみえる農民像を描きながらも、晩年⁽⁴⁾に至って、不正に倦んだドルドラ神の踊りにたとえた都市と農村のプロレタリアート層の反乱・革命に希望を託したことは、サハジャーナンドが安住の地を得ることのないサンニャーシーであつたことを如実に示している。サンニャーシーから農民運動へというサハジャーナンドのたどつた道は一見特異な道と映るかもしれない。しかしながら、サハジャーナンドの偉大さは、単に彼がサンニャーシーであつたがためではなく、現実のサンニャーシーの「隠遁」を克服しうるサンニャーシー像を求め続け、さらには、「真の農民」像を追求してやまない「農民主義」者であつたからである。

ときにインドの古典に論証と行動の根拠を求め、のちにはマルクス主義を社会認識と変革の理論的武器に加えたサハジャーナンドの生涯は起伏に富み、彼の「個人主義」を指摘することは決して困難ではないが、その生涯に一貫して脈打っている思想の求心性と開放性とを汲みとることができよう。いくたびとなく襲つた思想的危機から立直ることができた理由もこの点にあるといえる。

サハジャーナンドの思想と行動がインド農民との不断の接触のなかで培われていったとすれば、我々は彼の思想の軌跡にサンニャーシーの世界から農民の世界にまで及ぶ歴史を変革する伝統の共通の質を見出すことも可能であろう。しかし、サハジャーナンドを動かしたものが、一人のサンニャーシーの世界観であると同時に、なによりも現代に生きるインドの農民であつた事実を忘れることはできない。

「註」

5

- (1) この稿は、本学報21号（1969年3月）に同じ標題の下に記した拙稿に続くものである。なお、第二部については、1966年3～4月に訪ねることのできたビハール州アーカイブズおよびサッチダーナンド・シンハ図書館（パトナー）の資料を利用している。
- (2) Ācharya Narendra Dēv, Rāshtriyaṭā aur Samājvād, Varānasī, Samvat 2030, p.97.
- (3) P.C. Joshi, Communist Reply to Congress Working Committee's Charges, Part I, Bombay, 1945, p.40.
- (4) Rāhul Sānkṛityāyana, Mēri Jīvan Yātrā, Bhāg 2, Illāhābād, 1950, p.533.
- (5) Patna Commissioner's Fortnightly Report, 1939 (S.C.R.O. No. 63).
- (6) Rājendra Prasād, Ātma Kathā, Nāi Dillī, 1965, p. 659.
- (7) *The Indian Nation*, April 23, 1941.
- (8) Chief Secretary to Government, Report on Political Events in Bihar, Jan. I, 1940.
- (9) Cross Roads being the Works of Subhās Chandra Bose, 1938-1940, London, 1962, pp. 283-284.
- (10) M.A. Rasūl, Krishak Sabhār Itihās(以下 Itihās と略す), Calcutta, 1969, pp. 139-140 および M.A. Rasul, A History of the All India Kisan Sabha(以下 A History と略す), Calcutta, 1974, pp. 75-76.
- (11) Swāmī Sahajānand Saraswatī, Mērā Jīvan Sangarsha, Bihtā, 1952, pp. 560-566.
- (12) Swāmī Sahajānand Saraswatī, Jang aur Rāshtriya Larāi, Patnā, n.d., p. 5.
- (13) 福井慶三著『独立運動をめぐる現代印度の諸情勢』1943年 26頁。
- (14) *The Searchlight*, Aug. 7, 1942.
- (15) *Ibid.*, Aug. 7, 1942.
- (16) *The Indian Nation*, July 24, 1942.
- (17) *The Hindu*, Aug. 10, 1942.
- (18) 運動初期のパトナーの状況についての筆者の記述は、拙稿『第二次世界大戦とインド』岩波講座『世界歴史』29. 1971年, 151～152頁参照。
- (19) *The Searchlight*, Aug 17, 1942.
- (20) *People's War*, Sep. 13, 1942.
- (21) Rāhul, op. cit., p. 597.
- (22) Report of Civil Disobedience Movement by Subdivisional Officer, Begusarai, Dec. 21, 1942 (S.C.R.O. No. 47).
- (23) Papers on Secretariat Firing and Daily Reports on the August Movement (S. C. R. O. No.70).
- (24) File No. 423/41, Special Section, Political Department, Government of Bihar.
- (25) Selected Speeches of Subhas Chandra Bose, Delhi, 1962, p. 152.
- (26) Rasul, A History, pp. 86-87.
- (27) 1943年5月23日からボンベイで開かれたインド共産党第一回大会では、「左翼民族主義」の批判と自己批判が基調の一つとなった。
- (28) The Indian Annual Register, 1943, Vol. 1, Calcutta, p. 313.
- (29) *People's War*, March 26, 1944.
- (30) *Ibid.*, Aug. 20, 1944.
- (31) Rasul, A History, p. 114.
- (32) *Ibid.*, p. 324.
- (33) *People's War*, April 15, 1945.
- (34) G. Adhikari, Communist Party and India's Path to National Regeneration and Socialism, New Delhi, 1964, pp. 83-84.

6

- (1) 古賀正則「会議派による農民組合結成の試みータンドン文書からー」松井透編『インド土地制度史研究』1972年, 所収。
- (2) Rasul, A History, pp. 339-340.
- (3) Swāmī Sahajānand Saraswatī, Kisan Sabhā ke Sansmaran, Illāhābād, 1947, pp. 18-49.
- (4) *The Indian Nation*, May 25, 1947.

- (5) Ibid., Aug. 10, 1947.
 - (6) Ibid., April 6, 1947.
 - (7) Ibid., April 13, 1947.
 - (8) *The Searchlight*, Jan. 5, 1948.
 - (9) Ibid., Jan. 14, 1948.
 - (10) Swāmī Sahajānand Saraswatī, Mahārudra ka Mahātāndav (以下 Mahārudra と略す), Bihtā, n.d., p. 11.
 - (11) *The Searchlight*, Jan. 26, 1948 および Rasūl, Itihās, pp.141-142.
 - (12) Rasul, A History, pp. 342-344.
 - (13) Sabhāpati, Bihār Prāntīya Samyukta-Kisān Sabhā; Bhāratīya Samyukta Samājavādī Sabhā- Lakshya tathā Kāryakram, Patnā, n.d., pp. 2-8.
 - (14) 当時の前衛ブロックの議長代理、ヤジの弔文によれば、死の二ヶ月程前、サハジャーナンドは前衛ブロックに加入したという。 *The Searchlight*, June 29, 1950.
 - (15) Sahajānand, Mahārudra, pp. 6-7.
 - (16) Ibid., p. 15.
 - (17) *The Searchlight*, April 10, 1950.
 - (18) Sahajānand, Mahārudra, p. 8.
-
- (1) *The Searchlight*, June 28, 1950.
 - (2) *The Indian Nation*, June 29, 1950.
 - (3) Rasul, A History, pp. 74-75.
 - (4) Sahajānand, Mahārudra, p. 11.

(1976. 8. 24.)